

國學院大學學術情報リポジトリ

人形供養の形成と発展について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-04-30 キーワード (Ja): 人形供養, 西山哲治, 作られた伝統, イベント化, 近現代 キーワード (En): 作成者: 鳴海, あかり メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000338

人形供養の形成と発展について

鳴海 あかり

論文要旨

人形供養にんぎょうくようという習俗はイメージに反し実は現代的な習俗であり、作られた伝統でんとうであることが指摘されている。近世にも人形供養のような行事が行われた記録はあるが、広く一般的な行事とは言い難く近現代きんげんだいの人形供養には直接つながらない。現代に続く人形供養を始めて行ったのは一九一八年、私立帝国小学校校長・西山哲治にしやまてつじである。彼は教育改革の一環として人形供養を行った。他にも戦前の供養として大供会が関わった「雛供養」があった。戦前当時は伝統的でない新しい行事としての批判も見られた。戦後になるとまず人形にゆかりのある寺社が

人形供養を行うようになった。これにより人形供養は一気に「伝統行事」としてイメージを強くしていく。その後の画期と言えるのが明治神宮の「人形感謝祭」であり、これは従来と異なるイベント化かされた人形供養として話題になった。またそのころになると日本人形のイメージ変化や大量生産の影響も伴い、人形供養は単に人形を廃棄する手段としての意味合いも表れるようになる。¹⁾

【キーワード】人形供養にんぎょうくよう 西山哲治にしやまてつじ 作られた伝統でんとう イベント化か 近現代きんげんだい

はじめに

人形供養という行事がある。人形やぬいぐるみを捨てることになったが、ゴミ箱にポイと放り込んでしまうのも気が引ける。そこで寺社などで供養してもらってから廃棄をお願いするのだ。現在全国各地の寺社や、あるいはセレモニーホールやイベントなどでも人形

供養を行っている。この行事は一般的に「伝統的な行事」と思われているが、実は比較的新しい行事であることが先行研究により既に明らかとなっている。しかしそう古くない行事である割には、全体の変遷、特に初期において人形供養行事がどのように形成されたのかはいまだ明らかとなっていない。そこで今回は各時代において主要な人形供養行事をそれぞれ取り上げながら、時代の変遷を追っていききたい。また人形というものは様々な側面があるが、今回は人形供養にて用いられることの多い愛玩用・観賞用人形について述べることにする。

ここで「供養」の定義として『日本民俗大辞典』を引いておこう。「人の死後、泣き人の冥福を祈って善事を修してその功德を手向けること」とされ、「針供養をはじめ、人形供養・茶筌供養など供養の対象が無生物にまで及んでいる」ともある²。本論での供養の定義、そして人形供養との関係はこれに準ずるものとする。

一、先行研究

これまでの人形供養に関する研究は実のところ数少ない。紹介すべきは以下の四つの論文であるが、大きく一つの立場に分けられる。一つは人形供養をモノ供養の一部として論ずるものである。例えば、大崎智子は上野清水観音堂の人形供養習俗について経緯や現況を述べ、人形供養の現況について考察する³。

水口千里は、名古屋市真言宗真福寺の大須観音で行われる人形供養についてその様子を報告した後、人形供養を道具供養の一環という枠組みでなぜ行われるのか考察する。人形は捨ててはいけませんが保管するスペースがないというジレンマを解消するために人形供養はあり、宗教色が薄れることによって受け入れやすいものとなっているとした⁴。

中村慎吾は、まず松本市内にて行われている人形供養を仏教系・神道系・葬祭業者に分類して分析し、人形供養祭の本質は魂を抜いたたの物質へと変化させることだとする。次に個人的に寺社に頼んで供養を行ってもらうケースや人形店の人形供養についても触れる。後半では人形供養の起源について、古びた雛人形を流したり辻の祠に収める習俗が古形態としてあったことを挙げる⁵。

もう一方の立場は、⁶「供養」よりも⁷「人形」に重きを置いて論ずるものである。田中正流は「従来の道具供養を参考にして新しく作られた人形供養の事例」を題材にすると述べ、人形供養から主に人形観の変化を読み取ろうとしている。当時著者が勤務する宝鏡寺の人形供養事例を挙げた後、全国各地の人形供養の分析を行い、一九八〇年頃から爆発的に増加していることについて高度経済成長の影響を指摘する。またこの時期に実在する髪が伸びる人形として話題になった「お菊人形」も関係しているのではと指摘する。

これまでの人形供養に関する先行研究は、特定の人形供養行事にフォーカスするものが多かった。また現在につながる初期の人形供養については、特に人形供養全体を述べようとする中村論文や田中論文では触れてはいるものの、ただ簡易的に紹介するにとどまり詳細に述べることをしていない。そこで今回は現在の人形供養行事がどのように形作られていったのか、当時の新聞・雑誌記事などを参照してその様子を考察していく。そして後発のものでも有名な人形供養や人形供養観を変化させる画期となった人形供養について個別にいくつか考察することで、人形供養行事の変遷を考えていくことを本論の目的とする。

また本稿はこの二つの立場のうち、後者の人形観の変化という立場から述べるものである旨をここで述べておきたい。

二、人形供養―近世以前

これも既に指摘されていることだが、⁸古くなったり汚損した人形を供養する⁹ということが近世以前になかったわけではない。江戸時代の後期には既に確認できる。喜多村信節による随筆『嬉遊笑覧』（文政十三／一八三〇年序）に次のような記述がある。

相模愛甲郡敦木の里にて、年毎に古びな損したるを儿女共持出てさがみ河に流し捨ることあり、白酒を一銚子携へて河辺に至れば他の儿女もこゝに來り、互にひなを流しやることを惜みて彼白酒をもて離杯を汲かはして、ひなを俵の小口などに戴て流しやり、一同に哀み泣くさまをなすことなり。⁸

汚損したひなを悼み、川に流すという。これはあまり一般的に見受けられる行事ではないが、『源氏物語』にも確認できるような、厄をひとがたに移して流す雛流しの行事の変形であると思われる。江戸時代、安定した社会で愛玩用の豪華な人形が生産されるようになった中で、古くあるいは汚損した人形を処分しなければならぬと考えたのではないだろうか。表面的には今現在行われる人形供養の在り方と通ずるものがある。しかしこうした行事がそのまま近代以降の人形供養行事につながったとはどうも思えない。後に具体的に述べるが、初期の子供のためのイベントとしての人形供養行事は、明らかに日本に從來から存在する習俗の文脈を引き継がない新しい行事としてあった。

後世で近いと思われるのは、三月三日に河辺で行われるオヒナガユと呼ばれる行事である。例えば群馬県多野郡上野村では、月遅れの四月三日早朝に女の子が連れ立って河辺に行き、石を積んで作ったかまどでお粥を作り、これをお雛様に供えて子供達も食べたという。このように上記『嬉遊笑覧』に載る習俗は近代の人形供養行事にはつながらず、オヒナガユのようなある種の雛祭り行事へと引き継がれ、次第に都市的な要素として現れていた人形供養的要素も失われていったと考えられる。

三．戦前の人形供養

三―一、帝国小学校人形供養

我が国で初めての人形供養行事は、一九一八年東京都巢鴨にあった私立帝国小学校人形病院で行われた人形供養であると考えられる。同年の『児童研究』に次のような報告がなされている。

人形供養

私立帝国小学校人形病院の主催にて九月十四日午前十時より同校内にて人形供養会を執行了り。先づ同校生徒一同著席して人形病院の歌を合唱し、次に二名の僧侶の読経ありて同校長西山ドクトル弔問を朗読し、次で生徒一同左の人形供養の歌を合唱して後

十五の壊れた憐れな人形を同校奥庭の一隅に埋葬して高さ六尺の塔婆を立てたり。斯の如き試みは児童の情育上に必ずや良好の効果あるべしと思¹⁰准す。

この後、人形供養の歌が書かれている。そう、近代最初の人形供養は学校で子供の教育のために行われるものであったのである。人形は現在一般的に子供の遊び道具でもあるから、今でも子供のために行う面はあるが、やはり「[〃]寺社」で「[〃]伝統行事」として行われる現在のそれとは大きく異なる印象を持つと言える。企画したのはここでいう「同校長西山ドクトル」こと、西山哲治である。この人は何者なのだろうか。

先行研究によれば¹¹、明治末から大正期にかけて展開された大正新教育運動の先駆けともいえる教育者が西山哲治であったという。関連する経歴を軽く述べると、明治三十八（一九〇五年）三月に東洋大学の前身である哲学館を卒業後、渡米してニューヨーク大学教育科に入学。一九〇九年にマスター、一九一〇年五月に日本教育史の論文でドクトルの学位を取得し、七月に帰国した。またこの在米時から帰国直後にかけて教育に関する著書を精力的に出版している。それにより自身の教育観念を積極的に発信した後、一九一二年に私立帝国小学校・幼稚園を開校、一九一三年に人形病院を設立、そして一九一八年から人形供養を行ったという次第である¹²。

こうした近代以降の人形供養が『嬉遊笑覧』に載る習俗と最も異なるのは、『嬉遊笑覧』では雛流しという人形で厄払いをする行事の延長として人形を「流す」のに対し、こちらは人形を人間と同様の形で葬送することだろう。これは以後の様々な人形供養行事でも共通していることである。近世以前ではあくまで人形はヒトガタと同様の扱いであったのに対し、近代以降の人形供養では人形はほとんど人間と並ぶ扱いを受けている。ここに人々の人形観の変化が読み取れよう。

しかしこうした近現代の人形供養が『嬉遊笑覧』に載る近世以前の習俗と連続性がないのなら、西山はどこから「人形を人間のよう[〃]に供養する」という着想を得たのだろうか。

西山は前述のようにアメリカに留学し、そこで学んだアメリカの教育学の知識や考え方を取り入れて児童中心主義を唱え教育改革の必要性を訴¹³えた。人形病院・人形供養はそういった教育改造論の一部としての実践であったという前提は述べておくべきだろう。そし

て西山は人形についても多くの著作を残している。中でも第一回人形供養と同年に出された『子供の憧る、人形の国』(一九一八)¹⁴はまるまる一冊にわたって人形と教育に関する自身の考えや人形病院・人形供養行事の実践について述べている。特に「第一 人形と児童心理」の「六 人形病院及人形供養の必要」(三十七頁)では「斯くの如く少女は人形を全く生命あるものとして取扱つて居るのであるから、それが怪我をすれば人形病院に入院させて直してやるといふ同情心親切心が動かなくてはならぬ、教育上人形病院設立の必要が起つて来るではないか!! 又到底手術し得ない人形は死んだものとして懇に葬つてやるといふことも教育上必要になつて来るではないか。」と、人形病院・人形供養行事が『教育上必要』であるという考えを示している。また「第六 スタンレーホール博士の人形研究」では、「これまで誰も此人形について真面目に研究しようと企てなかつたのは寧ろ不思議なことである」とし、「スタンレーホール博士」が行つた人形の性格・睡眠・病氣・死亡・葬式といった項目についての大規模アンケート調査を紹介した後、その他いくつかの諸国における人形研究を紹介する。スタンレー・ホール(一八四四―一九二四)は当時、心理学の草創期に活躍し、教育心理学・児童心理学・青年心理学などの研究分野を開拓したアメリカの心理学者である。彼の人形研究は当時、複数の日本人研究者が児童研究の文脈で紹介しており、西山の論考もその一つとして位置づけられよう。¹⁵西山はスタンレー・ホールの人形研究に多大な影響を受け、この調査結果や自身でも行つたアンケート調査により国を問わず人形が大切にされていることに注目し、人形を治療したり葬儀を行つてやることで子供の教育に良い影響をもたらすことを期待して実践した結果が人形病院・人形供養行事であつたと考えられる。

三―二、関東大震災後の『雛供養』

戦前の人形供養として、もう一つ挙げられるものがある。『新編日本人形史』を著した吉徳の山田徳兵衛は『人形百話』という著書にて、帝国小学校の人形供養を紹介した後にかう語る。

別な話だが、大正大震災の翌春、震災で亡くなった多くの人形の霊を慰めようと、雛供養という催しがあつた。西鶴研究で有名な、そして人形愛好家であつた淡島寒月翁を中心に、趣味家や製作者など約五十名が、これも人形の著書のある凶案家杉山寿栄男

氏の牛込の邸内に集まって行われたのだが、郷土玩具研究家だった故有坂与太郎氏もまだ一青年で、空也の衆に加わって踊り念仏をしてまわられた。¹⁶

またこの会では「必ず『変わり雛』一点を考案して持参すべしとの条件であった」という。なかなかイベント性が高い。大正大震災というのは言わずもがな、一九二三年九月一日に起こった関東大震災のことだろう。当時の新聞を確認すると、実際に『読売新聞』一九二四年二月二十七日付朝刊にて雛供養の記事があった。「今年は焼けて雛祭をすることの出来ない多くの子供に気の毒」なため雛供養を行うとある。また「雛祭の活動写真」を写してみせるという。

しかしもう少し調べてみると、この前年の三月三日節句の日（無論、関東大震災より前）にも既に同系統とみられる「雛供養」が催されていたらしいことが、いくつかの当時の新聞からわかる。雛人形の収集家である前述の杉山寿栄男が、コレクションのうち長い年月で手足を失った人形の為に邸内に古代雛をかたどった供養塔を作り、三月三日に除幕式と供養を行ったのだという。来賓には淡島寒月の名も見える。¹⁷

もう一つ注目すべきは、雛供養開催にあたって「大供会の人達」に相談したとあることだ。¹⁸ 大供会とは、古物収集の会「集古会」を母体として一九〇九年に結成された人形玩具愛好者による会である。結成当初はあくまで私的に集まって人形玩具についての情報交換などの活動をする会であったが、人形展を行うなど次第に外部に向かって発信を行うようになり、特に三越呉服店との関わりが強くなっていく。¹⁹ 一九二五年二月十九日（前述の雛供養の翌年である）に大供会主催で三越にて行われた人形展では、一緒に人形供養を行ったという記録がある。²⁰ 「大震災で焼けた人形の供養を厳かに営んだ」²¹とも書かれることを見ると、前年の雛供養と地続きにあったものであると考えられよう。

時系列が前後してしまったので整理する。一九二三年三月三日、杉山寿栄男が大供会の人々に相談の上邸内に供養塔を作り、除幕式と雛供養を行う。同年九月一日に関東大震災発生。翌一九二四年に焼けた人形や雛祭りを行なえない子供達のための雛供養を杉山寿栄男邸で実施。供養塔を建てていたからここにしたのであろう。さらに翌一九二五年二月十九日、前々から恒例であった三越での大供会

こちらも「本来の意味」「本来のそぼくな意味を逸脱」「行事のための行事」など、どうもぼつと出の新しい行事に対する批判といった口ぶりに思えてきてならない。少なくとも人形供養を「伝統行事だ」と思っていたならば、本来とは違う行事のための行事などという言い方はしないのではなからうか。これらの記事からは、当時人形供養という行事が新しい行事として認識され、また伝統的ではない新しい行事であるが故の拒否感を示す層が確かに存在したのだと考えられる。

四―二、人形供養は土葬だった？

ところで、今紹介した記事は現代人から見ると一つおかしなところがなかっただろうか。そう、記事の筆者は供養に出された人形を見て「土に埋められる」と思ったのである。燃やすとは考えなかった。

この疑問の答えは当時の人形供養の様子を詳細に書いた記事を見てみればわかる。結論から言えば、実際に初期の人形供養は土葬であったのではないかと考えられる。まず前述の巣鴨帝国小学校人形病院での事例を見てみよう。まず読経や校長による弔問朗読などのち『読売新聞』一九一九年六月十二日付朝刊では「人形埋葬」、同一九二〇年六月六日付朝刊では「亡き人形の埋葬」とある。埋葬というのは遺骨にも用いるものであるので断言はできないが、とりあえず燃やすとか火葬といった文言は確認できない。これだけなら書かれていないだけではないかとも思えるのだが、同一九二五年六月十日付朝刊には「住職の読経に次で十数本の和洋人形を埋め女生徒が土をかけ、生花を供え」と人形を燃やす隙が見られず、どう見ても土葬である。また同一九二六年六月三日付朝刊では「毎年数十本の人形を校庭の人形塚に埋め供養する」とある。

それが火葬へと入れ替わっていくのは一九五〇年代くらいであると考えられる。象徴的なのは「読売新聞」一九五三年十一月二十日付夕刊の記事である。先ほどの「心ざびしい人形供養」という記事のちょうど一年程前だが、見出しに「お経あげて、火葬」。これは珍しい人形供養」とあるのである。これは後に紹介する芝増上寺の人形供養の初期の記事なのだが、本文にも「古びた人形約二百点が祭壇で焼かれた」とあり、他におかしな点は見当たらない。この時点では火葬での人形供養は珍しかったのだと考えてよいだろう。またほぼ同じころに始まったと思われる覚王山日泰寺、上野寛永寺清水観音堂での人形供養もまた、初期段階にて既に火葬にて供養を

行っている。²³

ではなぜ火葬になったか。まず単純にかさばるからという理由もあるだろう。しかしここに挙げた火葬での人形供養の共通点を見てみると、寺社であることが指摘される。つまり戦後一九五〇年代から寺社で行われるようになったために、お守りなどを供養するのと同様にお焚き上げを行うようになったということが考えられる。加えて人形がくべられ、ほうほうと勢いよく燃え上がる様はインパクトが強く見栄えもするため、行事の目玉にもしやすい。参拝客はそれを見て人形に思いをはせるなどするのである。実際、人形供養を特集した新聞記事では特に写真に撮られたり、言及もされやすい場面である。このように人形供養で火葬を行うことは多数のメリットがあったと言える。²⁴

五 戦後の人形供養―一九五〇年代以降、寺社への展開

五―一、芝増上寺

芝増上寺とは東京都港区芝公園にある浄土宗七大本山の一つである。今現在は人形供養を行っていないようだが、一九五〇―六〇年代にかけて盛大な人形供養を行っていた様子が確認できる。最も早く確認できる記事は先ほど火葬の話題でも取り上げた、『読売新聞』一九五三年十一月二十日付夕刊、および『毎日新聞』同日夕刊の記事である。これらによれば、港区芝新橋小沢人形学院の主催で同日午前十時から行われたという。実際の様子としては『毎日新聞』の記事には以下のように書かれている。

椎尾弁匡大僧正初め六十人ものお坊さんがあげる読経のうちに、青い眼の西洋人形や美しい日本人形が次々と焼かれ、小沢校長は今まで一緒に暮したお人形の功績をたたえ、はなむけの言葉をおくった。

なかなか大規模な行事となっている。またここで「十数人のアメリカ婦人もまじって」行われたとあるが、この後何年か後にはすぐ

に各国大使夫人が参加したという記述が何回にもわたって見られる。一九六三年に「今年から初めて一般によびかけて行なわれたものです」²⁵とあることからみると、この時点では公的な行事という面が強かったと考えられる。

『読売新聞』の記事では「徳川時代には人形供養があった」という文献があるがその後には絶えてなし、本日こゝにわたしたちこれを毎年復活する」という主催の発言が記されており、『毎日新聞』の記事のタイトルは「人形供養の復活」である。人形供養が江戸時代に既にあつたのかと思ってしまうが、これは次に紹介する上野清水観音堂や淡島神社と同じく、お礼参りとして人形を奉納する行事や雛流しなどの行事を人形供養と同一視しているに過ぎないと考えられる。これらは厳密には人形²⁶で厄払いや祈願をするものであり、人形²⁶を供養するものとは性質が異なると思われるが、世間的には同一視されやすい。寺社側もこれらを同一視することで、新しい行事ではなく昔から続いている伝統的な行事であると主張しているのだろう。寺社仏閣としてのイメージ戦略の一環である。そのためこの芝増上寺の人形供養も「今回が初開催です」とは言わずに「徳川時代に行われていたものを復活します」と主張しているのであると言える。

五―二、上野寛永寺清水観音堂

東京都台東区上野公園にある寛永寺のお堂、清水観音堂。京都の清水寺を模したというここで今でも行われているこの人形供養もまた、一九五〇年代から始まった人形供養として代表的なもののひとつであるといえる。第一回として報道されているのは一九五七年九月二十二日である。『読売新聞』一九五七年九月二十三日朝刊によれば、「東京都玩具人形小売商連盟のいわば商魂供養²⁷で戦後復活第一回」とある。供養の様子としては、人形三百個を前に寛永寺住職が読経した後、傍の空き地で人形を焼いて商売繁盛を祈ったという。連盟に加盟する人形店から施設の子供たちへ約三百の人形が贈られ、またこれをもとに「人形塚」を建設するということが記されている。ただしその後「さる（引用者注・昭和）三十三年から始まったもの」²⁷、「一九五八年からは、家庭で壊れたり、古くなった人形もするようになった」²⁸と各種新聞記事で紹介されたり、先行研究で挙げた大崎（一九九五）も「昭和三十三年から同寺の年中行事として人形供養会がおこなわれるようになった」としている。

大崎も述べている通り、清水観音堂には子育て観音（子授け観音とも）が祀られており、子宝に恵まれない夫婦が祈願し、成就すると今度はお礼と生まれた子供の成長の無事を願って人形を奉納するという習俗が戦前からあった。大崎も明確に区別した上で記述しているが、つまりこれも人形^々によって^々祈願を行う習俗であり、人形^々を^々供養する行事ではなかった。そのうち古くなった人形を供養してほしいと人形を持ってくる人が現れたため非公開の行事としてお焚き上げ供養を行い、それを聞きつけた東京都玩具人形小売商連盟が協賛し、昭和三三年（一九五八）から同寺の年中行事になったと大崎は述べている。このころは、こうした人形について何らかのゆかりがある神社にて人形供養が次々といわれていく流れがある。

注目されるのは『読売新聞』一九六七年九月二十一日朝刊の「焼かないで^々慰霊^々 上野 異例の人形供養」という記事である。見出しの通り、ここでは人形を燃やさなかった。「国宝に指定されている観音堂境内で火を燃やすことは防火上好ましくないと消防署からきついお達し」があったためであった。先ほども述べたように、火葬が主流になるのは一九五〇年に入ってからのものである。しかしこの一九六七年の記事では既に火葬が当たり前となっていて、却って燃やさないことが「異例」のこととなっているのである。ものの十三年で全く意識が逆転してしまっているという事実は特筆すべきことであろう。ちなみにこれは一時的なことであったようで、その後はまた火葬にて供養を行っている。

五―三、宝鏡寺

宝鏡寺は京都市上京区百々町にある臨済宗の尼門跡寺院であり、一六四四年以来歴代皇女が入寺してきた。また入寺する皇女のため、父である天皇から折に触れて人形が贈られてくることがあり、多くの人形が所蔵されている。そのため宝鏡寺は現在「人形寺」を名乗っており、人形供養でも有名である。³⁰

宝鏡寺の人形供養については先行研究でも挙げた田中論文にて、「昭和三十四（一九五九）年より人形供養が行われている」「人形塚が昭和三十四年に建立された」とある。³¹ 著者である田中は当時宝鏡寺に主任学芸員として勤めていた。人形塚建立については宝鏡寺の公式ホームページでも「境内に建てられたのは昭和34（1959）年のことです」とある。しかし人形供養については「昭和32（1957）

年の秋より人形展が始ま」った後、「その後関係者によって年一回、秋に人形供養祭（及び関係物故者供養祭）が営まれることとなり、人形塚も建立され」と、開始年があいまいである。

そこで宝鏡寺人形供養について当時の記事を探してみると、『東京玩具商報』一九五七年十二月号の記事に、十一月七日の京人形商工業協同組合臨時総会にて議題の一つとして「又二月一日に宝鏡寺でも、人形供養を行うことを協議決定した」とある。また十一日一日から三十日まで都市教育委員会・京人形商工業協同組合・有識文化協会等の後援による人形の特別展覧・一般公開、十一月一日に仮供養塔建設・人形供養の実施、人形の寺として指定（京人形商工業協同組合との申し合わせによる）した、といったことが書かれている。³³

また当時の証言としても、一九五八年五月に京都府出身の作家真下五一による「人形の寺」という随筆がある。

……これに対抗したわけではないけれども市内の近いところに人形の寺というのがある。……どうも限られた人だけしか知らないのは惜しいというので昨秋から、時を経て一般にも公開するようになった。

だがそれだけでも、不意に訪ねた人には目にふれることが出来ないから一つ、ガラス箱を造つて、その内のいくらかでも常時展観出来るようにしてはと、昨秋初めての人形供養を営んだ際希望しておいたところ、本当にこの春から、立派なケースをつくつて、常置するようになった。これで旅の人も大いにあずかることが出来るというものである。³⁴

これによれば人形の一般公開が始まったのは「昨秋」＝一九五七年の秋であり、記述が一致する。またさりげなく「昨秋初めての人形供養を営んだ」ともある。ただどちらにせよ人形供養がどのように行われたのか、詳細が分からないのが残念なところだ。もしかすると当時目玉はあくまで人形展であり、人形供養はそこまで関心の寄せられるものではなかったのかもしれない。

一九五八年三月号の『東京玩具商報』には二月九日に京人形商工業協同組合等の後援により「雛まつりと人形供養の法要」を行い、二月十日から三月三十一日まで納められた人形類の特別展覧の実施した旨が記される。³⁵ 同十二月号の記事には人形塚建設について来年

秋開眼式を行う予定が示されている。³⁶ 同一九五九年十月号の記事にて、十月十日までに竣工の上開眼式を行う予定であることが記されている。記事に載る供養式次第には「人形（供養）法典」と「人形（供養）脱魂の儀」が含まれている。³⁷

その後、一九六六年に「人形の日」³⁸（十月十五日）行事の一環として十月十四日に日取りを変更。³⁹ 現在もこの日取りで続いているようだ。田中の一九五九年開始という記述については推測であるが、一九五七・五八年時点での人形供養はあくまで目玉である人形展の派生的・補助的イベントとしてあったためであろうか。そのために人形塚という今も残るものが建立された一九五九年を開始年としたのかもしれない。

五―四、淡島神社の雛流し

和歌山の加太淡島神社も現在人形供養の神社としてかなり有名である。淡島神は住吉明神の妃であったが婦人病のために疎まれ淡島へと流されたとされる説が近世に流布し、婦人病や安産祈願にご利益があるとされた。⁴⁰ また『紀伊統風土記』（天保十／一八三九年完成）では雛の奉納がなされている様子や、諸国の雛祭りの起源を主張している。⁴¹ そして淡島神社で現在三月三日に行われている「雛流し」とは『源氏物語』に見えるような紙雛を流すものではなく、豪華なお雛様などの供養人形を船に乗せて流すという一風変わったものである。この地の雛流しの変遷も辿ってみよう。まずかつて淡島神社に関連する雛流しとして、「粉河こかわの流し雛」というものがあつた。

粉河の流し雛 流し雛に上古禊祓の遺風を伝えるもので、その形態の雛に進化して尚形代の如く川に流す慣行のみを失はず、形彩も極めて単純で殆んど形代に近いものであり、各地に残存するもの、内鳥取は独り玩具の成果を見せてゐるが、粉河、広島、徳島など悉く簡素を極めてゐる。色紙で男女の雨体を作り、小豆台の首を添えたもので、俚俗に紀ノ川に流せばやがて加太の淡島に流れ着くものと称せられてゐる。⁴²

粉河とは当時の和歌山県那賀郡粉河町（現紀の川市）、紀ノ川上流域の町である。その紀ノ川から雛を流すと淡島にたどり着くと

いう伝承であり、また現在と違い素朴な手作りの雛であったことも分かる。もう一つ現在の淡島神社の雛流しと異なるのは淡島神社が「流すわけではないということである。では淡島神社自体には特にそれらしい習俗がなかったのかと言えば、淡島神社からお守りとして授与される紙雛があり、淡島雛とか小米雛と言っていた⁴³。その後戦後すぐまでは、主にこの二つの伝承が聞かれる。京都府京都市出身の俳人山口誓子の俳句全集には一九三二年に淡島神社を訪れたことが書かれており、「同行のF氏」から「古雛を海に流すときつと淡島神社の渚に漂着する」という伝説を聞いたという⁴⁴。またこの後古雛が社に奉納されている様子を見て句を詠んでいるが、当時これ以外に手作りの雛でなく「古雛」を流すということは確認できず、旅人の伝聞であることから少し疑わしい。

今のような「淡島神社の雛流し」がいつから始まったのかは、今野円輔の報告に明記されている。

……淡島神社では、それまでの焼雛行事をやめて、昭和三十八年の三月三日から、明治末期まで続いていた「雛流し」の古風を復活した。

こわれたり、古くなったりした人形約千体を祭壇にまつた後、長さ一・五メートルの小舟に積んで、巫女たちが投げる千羽鶴の中を、神官の手で、春霞のたなびく加太の海に流すのが昔ながらだったと新聞は報じていたが……⁴⁵

昭和三十八年（一九六三年）から、しかも既に「こわれたり、古くなったりした人形」を流す人形供養形式であったということが分かる。随分突然の大きな変化に思えるが雛を奉納するということは行われていたのだ。それが時代に乘じて人形供養形式へと変わったのだと考えられる。人形供養また筆者が二〇一九年十一月に宮司の方にインタビューをさせていただいた際には、この変化について加太の観光行事として推していくことにしていた。その後、「淡島神社の雛流し」は同社の年中行事として定着していき⁴⁶。

五―五、人形供養の「伝統行事」化

このような人形供養の寺社への展開は、人形供養行事の「伝統行事」化という影響をもたらしたと考えられる。無論、実際には新し

い行事であるのはこれまで見て来た通りだ。しかし寺社が人形供養を始める中で、「新しい行事を始めます」とはまず言わず、人形奉納や雛流しなど、人形について何らかのゆかりがあることを示し、人形供養は歴史のあるものだと宣伝した。寺社としてのイメージ戦略である。戦前と異なり全国各地で人形供養が行われるようになり、より多く広い層の人々が人形供養というものを知った。と同時に、人形供養は寺社で行われる「伝統行事」の一つであると認識されたのである。

当時の一般層の認識がわかる記述をいくつか挙げていこう。一九六一年一月に東京銀座松坂屋や大丸大阪店で行われたというアマチュアフォトコンテストの作品集に「村の祠にて」と題された、祠に納められた人形たちの写真が載っている。そして撮った本人のコメントとして「山村に伝わる何百年と言う伝統の儀式だが、華麗さもなく、つ、ましく今も尚続けられている人形供養」とある。人形が奉納される習俗と人形供養との連続性が受け入れられ、人形供養はるか昔から存在する儀式であるという認識が示されている。⁴⁷

また一九六四年、各種新聞広告を批評する記事にて、「マネキンの会社が、各商店で不要になったマネキン人形を集めて大供養をしますという広告」に対する批評として、針供養と並べて人形供養は「昔から」あるものだが、としている。⁴⁸一九六六年、上野清水観音堂の人形供養に触れた随筆にもまた、人形供養を同じく針供養と並置し「恐らくは元禄時代頃に始まっていたとも伝えられて」いる、と事実性という面ではやや不審な記述がなされる。⁴⁹

このように新たに「伝統」が創出されることは無論人形供養に限った話ではない。ドイツにおいて提唱され一九九〇年代には日本民俗学にも輸入されたフォークロリズムに関する議論が参考になるだろう。「セカンド・ハンドによる民俗文化の継承と演出」⁵⁰と定義されるこの概念の下で、さまざまな民俗事象が「伝統らしさ」を装って活用される事例が取り上げられている。⁵¹ 寺社での人形供養展開もまたこうした流れの一つとしても位置付けられるであろう。

六、一九八〇年代以降の人形供養

六一一、明治神宮人形感謝祭

人形供養のイベント化の画期となったといわれているのは明治神宮の「人形感謝祭」である。一九八九年九月十九日、久月や吉徳、サンリオ、バンダイなどの人形関連会社を中心に「人形に感謝する会」が発足。⁵² 第一回は同年十月十五日である。第一回人形感謝祭の詳細としては、人形供養の参加料は先着七百人一人二千円。また第二部として「米国人と日本の子供による尺八演奏や棒で操る人形を使った日本昔ばなし風の民話劇などを予定している」とのこと。『読売新聞』一九八九年九月二十七日付夕刊には予告として広告も出している。

この行事は口々に今までとは違う新しい人形供養として取り上げられた。⁵³ 一体、何が新しかったのだろうか。考えられることとしては人形関連会社が関わること。ただしそれこそ上野清水観音堂では、東京都玩具人形小売商連盟が関わっており、持ってきた供養人形の代わりに挙げる人形を用意するなどしている。このように、人形関連会社が関わることは初めてではない。上野清水観音堂などの場合と異なるのは、人形関連会社が裏方（少なくとも、一般参加者から見ても）ではなくむしろ主導者の立場にあったことだろうか。

もう一つ、『読売新聞』一九八九年十月十六日付朝刊の記事では、「これまで人形供養といえば、人形を燃やす形式がほとんどだったが、同会では人形と楽しいひと時を過ごすイベントにしよう」と計画。」と、従来の人形供養との違いを述べている。これまでの「伝統行事」として厳かなイメージがあつたものと違い、明るく楽しいイベント形式の人形供養は新しいものであつたと考えられる。名を「供養」から「感謝」に変えたのも、その一環であつたのだろう。

六一二、人形供養の目的変化

またこのころには、人形供養行事の目的が徐々に変化していくことが指摘できる。

『読売新聞』一九八三年二月二十七日付朝刊では群馬県文化財保護指導員である串田光一氏が八高線藤岡駅前に一九七八年春人形供

養碑を建て、それ以来人形供養を定期的に行っている旨が書かれている。そのきっかけはまだ飾れるひな人形がゴミとして捨てられるのを度々目にしたことだった。串田氏が注意すると「置く場所がない」などという「まことに割り切った答え」が返ってきた。それならせめてと供養碑を建立したという記事である。

「心さびしい人形供養」での「この行事のためにそれほど傷んでいないものまで、葬ってしまうのではないか」という不安は結果的にある意味的中した。ただ実際には「この行事のため」に「それほど傷んでいないものまで、葬ってしまった」のではなく、おそろく逆である。このあたり、田中論文の指摘がやはり正しかったのではないかと思う。高度経済成長により生活が豊かになって物がだんだんと余るようになり、さらに都市一極集中により狭くなった家では、人形を捨てなければならぬと思うようになった。そして人形を処分する方法として、人形供養が選ばれたのである。

田中はもう一つ重要な指摘をしている。田中は日本全国各種人形供養行事の開始年を調べ挙げ、一九八〇年代から特に行事の数が増加していることを示した。そしてこの当時を中心に広く取り上げられた実在する髪が伸びる人形「お菊人形」により、日本人形の怖いイメージが浸透した影響もあったのではと指摘している。「お菊人形」は北海道空知群栗沢町万字の万念寺に実際に安置されている日本人形であり、大正時代に三歳で亡くなった少女菊子が生前可愛がっていたが、その霊魂が乗り移って髪が伸びたのだとされている。このお菊人形が大ヒットにより、各地で「髪が伸びる人形」が「発見」された後、「髪が伸びる日本人形」という一大イメージを築き上げた。加えて日本人形そのものが女兒が遊ぶ日常のかつ一般的な人形ではなくなり、親しみの対象とは言えなくなったことも相まって、「日本人形だから髪が伸びるんじゃないか?」「何かあるんじゃないか?」「別に何も起きてないけどなんか怖い」といった風評被害を受けるようになった。その結果人形供養の件数が増加したとしても不思議ではないだろう。

個別実例で特筆すべきものをいくつか挙げよう。『六大新報』一九八三年五月二十五日号の「飛騨国分寺人形供養法要」という記事は岐阜県高山市総和町飛騨国分寺にて同年四月三日に初めて人形供養法要を行ったという記事だが、そのきっかけは「日頃愛情を注いだ人形や、亡き娘が生前可愛がっていた人形に霊が宿っているのではないか、また古い人形を処分できず困っている」との声が寄せられたことであった。この「亡き娘が生前可愛がっていた人形に霊が宿っているのではないか」という声は、お菊人形の逸話と重なって

くるものがある。もちろん決めつけることはできないが、お菊人形の影響が全くないとも思えない。

『読売新聞』一九八七年六月二十八日付朝刊では神奈川県金沢区金沢町の称名寺の人形供養を紹介している。十五、六年前に始まったもののようにだがこの記事の主題はそこではない。五、六年前から人形の奉納が急増し、素材も化学繊維が多くなり、高価な人形が惜しげなく捨てられ、焼却しきれなくなっているという。さらに注目されるのは続く一文である。「須方住職は、遊びに来る子供たちに、人形をあげてみたりもしたが、気味悪がって返す親が多い」という。かつて人集めの為、覚王山日泰寺や上野清水観音堂の人形供養において集まった子供達に代わりの人形を挙げる事が行われており、子供は人形をもらってご機嫌であった。⁵⁴ どれも人形の種類は書かれていないのが残念なところであるが、ここに時代の変化が生じていることが指摘できる。⁵⁵

また先ほど紹介した加太淡島神社では、取りすぎたクレーンゲームの景品のぬいぐるみの処分に困って置いていく人もいると『FLASH』二〇〇〇年六月十三日号の記事にある。筆者が二〇一九年十一月に宮司の前田智子さんにお話を伺った際にも参拝客が人形を預ける目的をお聞きしたところ、厄払い、娘の生まれた時に買ったものを結婚祝いに、震災で壊れてしまったといった事例の他に「クレーンゲームで取りすぎたのでおいていく人もいる」という答えが返ってきた。ここまで来ると信仰も供養もあつたものではなく、ゴミ捨て場に捨てるよりはまだまだましといったようにみえる。

人形供養を行う理由として、しばしば人の形をしているものを簡単には捨てられないとか、日本人は万物に魂が宿ると考えるから、などという説明が一般に多くみられるが、ここから見られるのはそういった信仰の面から言えることばかりが理由ではない（むしろそれはただの建前とすらいえるかもしれない）ということだろう。人形供養がここまで一般的な行事となったことで、「人形は供養すべきものである」というある種の常識が浸透した⁵⁶と同時に、人形供養は罪悪感のない処分方法として見られるようになったということが指摘できよう。

おわりに

以上、人形供養という行事が形成され、伝統行事として定着するまでを見て来た。

先行研究では、人形供養をモノ供養の一部として位置付けるものも見られるが、そういった位置づけはふさわしくないと著者は考える。確かに共通点が多いが、近現代の人形供養は、人形を人と同じように供養する、という点に特徴がある。それは対象が人の形をとらないモノ供養には見られない点であり、互いに無関係ではなくとも人形供養と他のモノ供養とは独立した概念であると思われる。以後聞き取り調査やさらなる文献調査も含め、人形供養にみられる人形観の変化を見ていきたい。

註

・引用に際して、旧字体は新字体に改めた。

- 1 現在各寺社HPでの人形供養の説明でも、「歴史」や「昔から」といった言葉が散見され、新しいイベントというよりも伝統というイメージを強くアピールしているのがわかる。日本人形協会 <<https://www.ningyo-kyokai.or.jp/kuyou/>> 長福寿寺 <<https://ningyokuyou.jp/>> 加太淡島神社 <<https://www.kada.jp/awashima/event/index.html>> 二〇一三年十月二十七日参照。
- 2 福田アジオほか編『日本民俗大辞典 上』吉川弘文館、一九九九年
- 3 大崎智子「上野寛永寺清水観音堂の人形供養」『日本民俗学』二〇一号、一九九五年二月
- 4 水口千里「現代供養事情 大須観音人形供養を例として」『近畿民具』二十二号、一九九八年
- 5 中村慎吾「人形供養という作法」『長野県民俗の会会報』二十七号、二〇〇四年
- 6 田中正流「人形供養にみる人形観の諸相」『人形玩具研究』第十六号、二〇〇五年
- 7 「人形供養」斎藤良輔編『日本人形玩具辞典』東京堂出版、一九六八年。また注5中村論文。

- 8 日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』別巻 嬉遊笑覧3、吉川弘文館、一九五九年
- 9 上毛新聞社編『全集写真探訪ぐんま⑤ 祭りと郷土芸能』上毛新聞社、一九八四年
- 10 「雑報 人形供養」『児童研究』第二十二巻第四号、日本児童学会、一九一八年十一月
- 11 山中芳和「大正期における西山哲治の教育改造論 帝国小学校の教育を中心に」『国際教育研究所紀要』第二十九号、二〇一八年
- 12 西山哲治『私立帝国小学校経営廿五年』モナス、一九三七年
- 13 豊福明子「西山哲治の著作と子供の権利について」『教育基礎学研究』第十一号、九州大学大学院人間環境学府教育哲学・教育社会史研究室、二〇一四年
- 14 西山哲治『子供の憧る、人形の國』南北社、一九一八年
- 15 近代日本においてはドイツの教育者フレーベルの恩物論が輸入され、欧米的な人形観、とりわけ、人形は女の子のもの、といった価値観が教科書や玩具の宣伝文句などを中心に普及し、日本人の人形観に大きな影響を与えたことが前提としてあげられる。増淵宗一『禁断の百年王国 少女人形論』（講談社、一九九五年）や足沢博昭『教育玩具の近代 教育対象としての子どもの誕生』（世織書房、二〇〇九年）などに詳しい。
- 16 山田徳兵衛『人形百話』未来社、一九六三年
- 17 『時事新報』一九二三年二月二十七日付、『読売新聞』一九二三年三月四日付朝刊、『朝日新聞』一九二三年三月四日付朝刊。
- 18 『時事新報』一九二三年二月二十七日付
- 19 神野由紀『百貨店で〈趣味〉を買う 大衆消費文化の近代』吉川弘文館、二〇一五年、
- 20 『芸天』第十四号、芸天社、一九二五年二月
- 21 『写真通信 教育資料』一三四号、大正通信社、一九二五年四月
- 22 齋藤甲子郎「玩具の祖神を制定せよ」『玩具界』一月・二月合併号、一九四九年二月
- 23 覚王山日泰寺については『東京玩具商報』通巻五一〇号（東京玩具人形問屋協同組合、一九五四年八月）に「第三回人形供養」を「火葬に附して」行ったとある。また上野清水観音堂では『読売新聞』一九五七年九月二十三日付朝刊にて、「第一回」人形供養を「人形を焼いて」行ったという。

- 24 人間の供養方法の変化は一九六〇年代頃から始まり、地域によっては一九九〇～二〇〇〇年代に変容したものもあるといわれており、人形供養の変化よりもやや遅い。国立歴史民俗博物館編『葬儀と墓の現在 民俗の変容』吉川弘文館、二〇〇二年、関沢まゆみ「葬儀の変化に対する地域ごとの対応の差」『国立歴史民俗博物館研究報告』第二三四集、二〇二二年参照。
- 25 『週刊新潮』一九六三年十二月十六日号
- 26 人形^々で厄払いや祈願をするものには、他にも東北地方を中心に分布する花嫁人形などがあげられるが、そういったものについてはまたの機会に論ずることにする。
- 27 『読売新聞』都民版、一九八四年九月二十六日付朝刊
- 28 『毎日新聞』東京版、一九九五年九月二十六日付
- 29 注3大崎論文、一一〇―一一一頁
- 30 百々御所宝鏡寺―人形寺―<http://hokyojin.net/>>二〇一三年三月十四日参照
- 31 注6田中論文と同
- 32 注30と同
- 33 『東京玩具商報』通巻第五四六号、東京玩具人形問屋協同組合、一九五七年十二月
- 34 『新文明』第八巻第五号、新文明社、一九五八年五月。
- 35 『東京玩具商報』通巻第五四九号、東京玩具人形問屋協同組合、一九五八年三月
- 36 同通巻第五五八号、東京玩具人形問屋協同組合、一九五八年十二月
- 37 同通巻第五六八号、東京玩具人形問屋協同組合、一九五九年十月
- 38 一九六五年、全国人形業界関係者が集まり人形需要の喚起のため制定された。
- 39 『東京玩具商報』通巻第六五二号、東京玩具人形問屋協同組合、一九六六年十一月。また『カメラ歳時記 京の365日 7月―12月』（高桑義生、フォト・キョート（写真）、淡交新社、一九六三年）では、宝鏡寺の人形供養の日付を十一月二日としている。

- 40 折口信夫「個人信仰の民俗化並びに伝説化せる道」『折口信夫全集』第三卷、中央公論社、一九六六年。また近世期の淡島信仰の広まりについては原淳一郎「近世における淡島信仰とその展開」(『山岳信仰と村落社会』岩田書院、二〇一二年)に詳しい。
- 41 『紀伊続風土記』第一輯、和歌山県神職取締所、一九一〇年
- 42 武井武雄『日本郷土玩具 西の部』地平社書房、一九三〇年
- 43 西澤笛畝「雛祭と雛人形」『家庭と趣味』三巻二号、一九一七年。ちなみに筆者が今年二〇二三年三月三日に雛流しを見学した際も、当日限定の授与品として小米雛を頒布していた。
- 44 山口誓子『俳句文学全集 第七 山口誓子篇』第一書房、一九三七年
- 45 今野田輔『季節のまつり 日本の民俗 第七巻』河出書房新社、一九六四年
- 46 藤嶽彰英「四季ごよみ」『カラー旅 第十 紀州と大和路』(主婦と生活社、一九六八年)、「ガイド 和歌山県観光のガイド」『温泉』第四十一巻六号(日本温泉協会、一九七三年)など、加太淡島神社の年中行事として雛流しが載る。
- 47 『月光フォトコンテスト作品集 第11回』三菱製紙、一九六一年
- 48 上村瑛「ここがよい・ここがまずい(新聞広告評)」『宣伝』一五二号、一九六四年一〇月
- 49 菅原寛「秋の上野点景」『高志人』高志人社、一九六六年十一月
- 50 河野眞『フォークロリズムから見た今日の民俗文化』創土社、二〇一二年
- 51 岩崎竹彦「フォークロリズムからみた節分の巻ずし」『日本民俗学』二三六号、二〇〇三年、コジューリナ・エレーナ「現代における民俗の活用に関する一考察 新潟県燕市の『越後くがみ山酒呑童子行列』を中心として」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』第六十九号、二〇一〇年、川村清志「近代における民謡の成立 近代における民謡の成立 富山県五箇山地方『こきりこ』を中心に(第三部 術語と概念の地平)」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一六五集、二〇一一年など。
- 52 『日経産業新聞』一九八九年九月二〇日付
- 53 「年間学会回顧——よむ・みる・きく」『かたち・あそび 日本人形玩具学会会誌』第一号、一九九〇年九月。

- 54 覚王山日泰寺については『東京玩具商報』通巻五六六号、東京玩具人形問屋協同組合、一九五九年八月。上野清水観音堂については『毎日新聞』一九五九年九月二十三日付朝刊、『読売新聞』東京版一九六四年九月二十一日付朝刊。
- 55 『毎日新聞』一九七七年九月二十六日付朝刊
- 56 注6 田中論文二六四頁では、「しかし八十代の女性に子供の頃遊んでいた人形はどうしたのか聞き取りをすると、皆がしていたように処分したという。祠に納めたりする地域があったにしろ大抵の者は他の処分品と同様に廃棄していたのである」としている。